

第 33 号

平成 31 年 2 月 14 日 (木)

教育情報紙

発行：島根県教育委員会
(教育指導課)

TEL：0852-22-5421

Mail：shidou@pref.shimane.lg.jp

子どもたちに身につけてもらいたい力を 育成するための授業改善について

教育指導課学力育成スタッフ企画幹
熊谷 和夫

小・中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領が改訂されました。今回の改訂では、中央教育審議会等で育成すべき資質・能力を議論するところから作業が進められました。新学習指導要領を受けて、これまで以上に、各学校で自校の児童生徒に身につけさせたい資質・能力について話し合うことが重視されていることと思います。

小・中学校では、すでに新学習指導要領の先行実施及び移行措置期間が始まり、各校で様々な取組が行われています。新学習指導要領のキーワードの一つである「『主体的・対話的で深い学び』の視点による授業改善」を実現するための様々な授業の工夫も始まっています。授業改善を進めるためにデータとして、県学力調査結果や全国学力・学習状況調査結果等を活用していくことが必要です。

昨年12月に小・中学校（義務教育学校を含む）及び特別支援学校小学部・中学部を対象として実施しました県学力調査の結果が、1月末に各校に返却され、5つの教育事務所ごとに結果説明会を開催しました。この学力調査は、学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習状況及び学習や生活に関する意識や実態を客観的に把握するとともに、全国学力・学習状況調査や過去の県学力調査等で明らかになった課題の改善状況を検証し、今後の教育施策の充実と学校における指導の一層の改善に資するために実施しています。

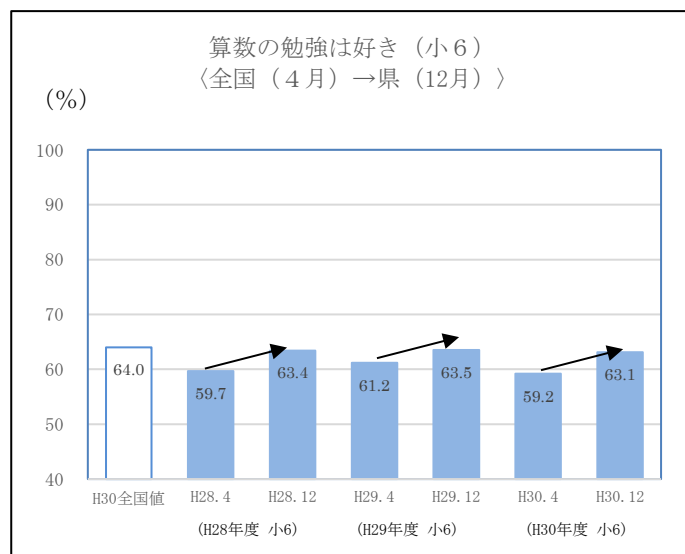
設問数も問題の難易度も昨年度以前とは異なりますので、平均正答率について過去の年度と単純に比較することはできません。また、各校の平均正答率と県平均正答率を比較し分析することは必要なことですが、単純に県平均正答率との差だけに着目して数値の上下にこだわるものではありません。

各校において大切にしていきたいのは、個々の児童生徒の強みや課題に気づくことと、学校全体での授業改善のための資料として活用することです。今号では、県全体の分析結果について記述していますが、大切なのは各校や個々の児童生徒の実態を的確に把握することと、課題を改善するための対策に乗り出すことですので、県全体の結果から自校の分析・改善への手がかりを見つけていただければ幸いです。

調査結果をうまく活用すれば、授業改善や個々の児童生徒への対応に役立てることができます。多忙な学校現場ですが、本来、力を注ぐべき学習指導及び生徒指導の充実につながる各校での取組を期待しています。

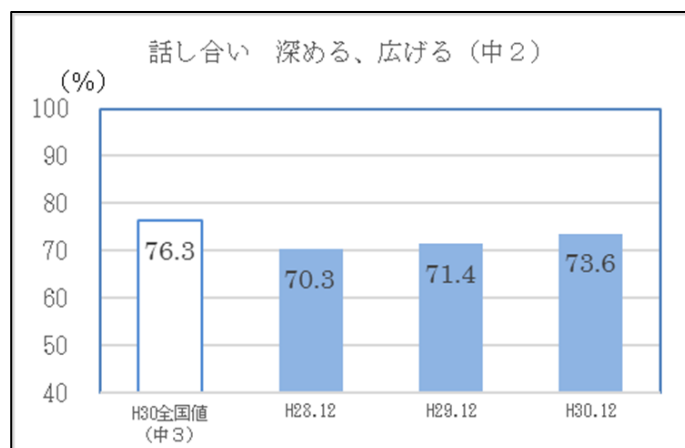
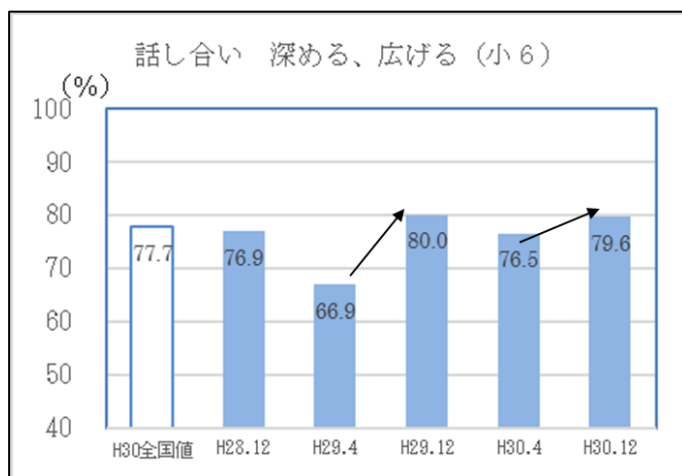
各校での授業改善が進んできています

これまで課題とされてきたことのうち、各学校での実践により改善が進んできている事項もあります。例えば、以前から大きな課題の一つとなっていた小学6年生の「算数の勉強は好きだ」の肯定的な回答の割合が右図のように上昇してきています。今回の調査では63.1%の児童が肯定的な回答をしています。4月の全国調査時に伸び悩んでいた算数好きの割合が上昇しました。過去3年間のデータを見ると、4月の全国調査時と比較して12月の県調査時における肯定的な回答率が、毎年上昇しています。算数授業改善推進校での取組や各学校での日々の授業改善への取組が、この結果につながっていると考えています。



「児童生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができると思う」についても、肯定的な回答率が上昇してきています。教師主導の一方通行型の授業ではなく、児童生徒の深い学びにつながる様々な工夫が各学校で実践されている証拠だと考えます。新学習指導要領でキーワードの一つとなっている『主体的・対話的で深い学び』の視点による授業改善への取組にもつながるものだと捉えています。

これまで課題となっていた国語の「書くこと」について、小・中学校ともに改善傾向が見られました。記述式問題において無解答率が下がり、記述することへの抵抗感が減少していると考えられます。算数・数学、英語の調査結果でも、国語と同様に記述することへの抵抗感が減少する傾向を示しています。このことは、各学校で各教科や総合的な学習の時間等で、自分の考えや意見を発表したり記述したりする取組が行われている成果だと捉えています。国語の授業だけで、「書くこと」の領域の力が育成されるものではありません。教科の枠を超えて育成すべき力を意識した取組が、大きな成果につながることを示しています。



引き続き改善が必要な事項への対策を進めましょう

様々な取組が結果に結びついてきていますが、引き続き改善が必要なこともあります。

例えば、右図のような小5・小6の「小数の乗法について意味を理解する」の問題では特に乗数（かける数）が1より小さい場合について、わり算で計算する児童が多く、課題が残っています。

また、小6の「円グラフを読み取り、基準量と割合から比較量を求めることができる」の問題についても、割合と実際の人数とを混同している児童が多数見られます。単純な計算問題はできても、それぞれの意味理解が十分ではない状況です。

各教科でも領域固有の知識を単に量的にたくさん習得することではなく各教科等の「見方・考え方」を働かせて、意味理解につながるような授業改善が求められています。

中学生の家庭学習についても引き続き課題があります。「学校の授業時間以外に普段（月～金）勉強する時間が、1日当たり1時間以上」の中学2年生の割合は54.2%でした。

1時間以上の割合が年々下がっていく状況は、右下図のとおりです。これまでも各中学校で様々な取組が行われてきており、その好事例を教育情報紙第19号や「家で勉強する！主体的な学びをしまねに（家勉）」で紹介しています。今一度、全ての教職員で自校の生徒にどのようなアプローチが有効かを話し合う必要があります。

8 次図のように、④のリボンの長さをもとにして、⑦のリボンと②のリボンの長さを表しました。

図

⑦のリボン
150cm
④のリボン
②のリボン

0 0.8 1 1.4(倍)

(2) ②のリボンの長さを求める式を、次の1から4までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 $150 + 0.2$
- 2 $150 - 0.2$
- 3 150×0.8
- 4 $150 \div 0.8$

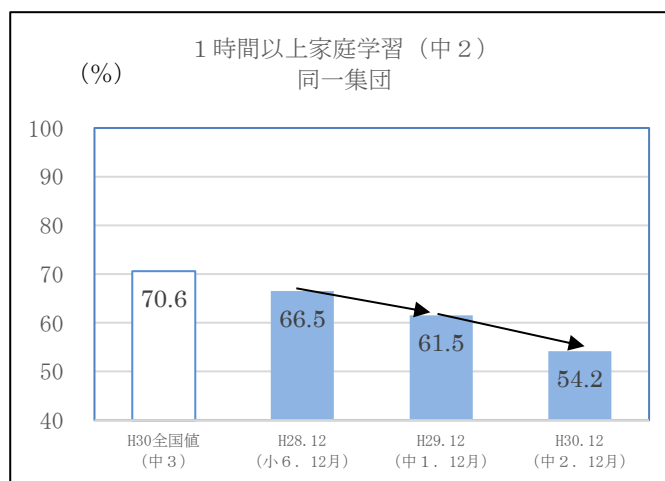
12 「遊園地の好きな乗り物」について、アンケートを行いました。次の円グラフは、そのときに参加した160人の投票結果をまとめたものです。

【好きな乗り物の割合】

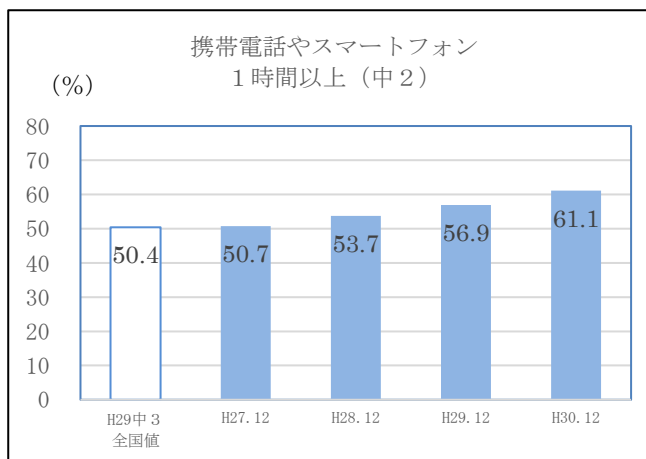
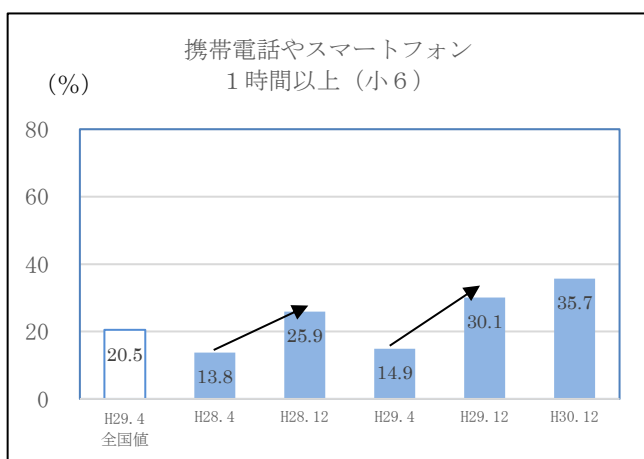
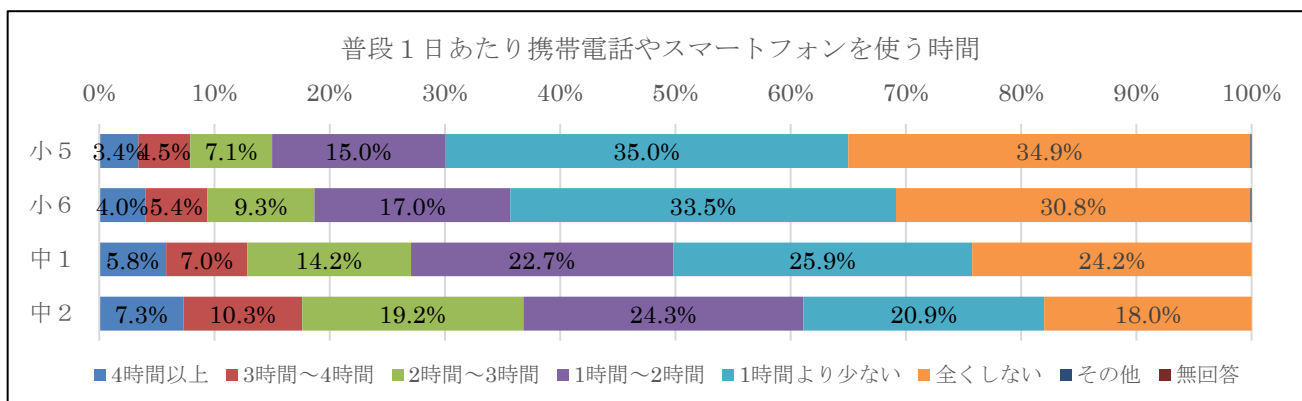
100%
0
90
80
70
60
50
40
30
20
10
0

その他
回転ブランコ
ジェットコースター
観覧車
ゴーカート

ゴーカートに投票した人は、何人ですか。答えを書きましょう。



スマートフォン等の使用時間についても、調査結果で気になる点がありました。下図のように学年が上がるにつれて平日のスマートフォン等の使用時間が長くなっていく傾向があります。家庭学習の充実とスマートフォン等の利用は、大きな関連があります。スマートフォン等の使用の低年齢化・長時間化や依存とも言える状況の子どもの増加は、家庭学習の充実の課題だけでなく、心身ともに健康を害する可能性が高く、学校・家庭・地域が一体となって取り組む必要があります。これまでも、様々な取組が各学校で実施されていますが、それぞれの学校の調査結果を詳細に分析され、一人一人の子どもへの指導も含めた早急の対応を期待しています。



＜保護者の皆様へ＞

平成30年度鳥根県学力調査の結果について、鳥根県教育委員会教育指導課のHPに掲載しております。調査結果については、平均正答率との比較ばかりに目が行きがちですが、大切なのは一人一人の子どもの学びを支えることに調査結果を生かすことと、各学校での授業改善に調査結果を役立てることです。

今回の調査で課題になったことの一つが、図の「普段、1日当たりどのくらいの時間、携帯電話やスマートフォンを使っていますか」という意識調査の結果です。中学2年生では、平日1時間以上携帯電話やスマートフォンを使っている生徒が61.1%と半数以上を占めています。学年が上がるにつれて、スマートフォン等の使用時間が長くなる傾向があります。

各学校でもメディアとの付き合い方の指導など様々な取組が行われていますが、各ご家庭でもお子様と家庭での生活の在り方について話し合う機会をもっといただくことが大切です。